

## 「おがさわら丸」から見た皆既日食

川村 誠

「おがさわら丸」による観測ツアーは、小笠原海運により主催された。「おがさわら丸」は3,553トンの貨客船で、父島－東京間を約29時間で結ぶ定期船である。今回のツアーも、父島－東京の往復は定期航路ということでツアー客以外に一般の方々も乗船していた。父島～皆既帯の往復は、日食観測ツアーということで、参加者は500人強と聞いている。船の定員が1041人ということなので、客室の方は余裕があったが、観測の可能なデッキは限りがあるため、観測直前になるまでは場所の問題は非常に気になった。船には前と後に広いスペースがあり、この部分が三脚利用写真撮影者に提供された。船首の方のスペースは、船倉のカバーの上であったが、観測のためにわざわざ安全柵が組まれるなど、いきとどいた配慮がなされた。

観測当日の朝、8:00に観測場所が開放され、場所とりがはじまった。特にくじ引きなどはなされず、また早くから並ぶこともなく、混乱は全くなかったように思う。どちらかという船尾の方が人気があったみたいだが、それでも場所に余裕があった。船首の方は、私が観測した方だが、十分すぎるくらい場所があった。うわさに聞く船の場所とり戦争とは無縁で、非常によかったと安心した次第である。

「おがさわら丸」の観測予定地点は硫黄島の東南約200kmであった。当日の朝、ほぼ予定地点に定刻より早く到着したので、近海をさまよってから、皆既の中心線にそって東北へと進んで、日食の観測をした。途中雲がかなりあったが、予定地点は快晴であった。部分食が進むにつれ、進路前方にある雲が目立ちはじめ、皆既の時にこの中に突入したら、という不安が、おそらくだれもの心の中にたちこめたに違いない。しかし、皆既のときも快晴で、これまでにない皆既食を見た。（私は前2回の皆既日食を経験しているが、いずれも薄雲を通してだった）

皆既25分ほど前から、金星が認められた。また、5分前くらいには木星が認められた。本影錐、シャドーバンドは、私は見なかったが、見たという人もいた。魚がはねるなどの異変はおきなかった。11h08m50s、コロナが見え出し、ダイヤモンドリングになった。太陽の南と北に大きなプロミネンスがあったのが印象的である。特に北側の方は2本並んでおり、ループみたいであった。コロナの流線は西側のものが最も長く、5～6R・くらいまで認められた。また、南北方向には4R・程度認められ、中間期の典型という感じであった。船の揺れは、35mmカメラの300mmの望遠レンズの視野をほぼはみ出すことなく動きまわるとい程度だった。早いシャッターを切るため、フィルムはISO 400と1600を用いたが、あとで考えると粒子の細かい低感度のフィルムで、内部コロナとプロミネンスを狙った方が良かったのではないかと思う。なお、皆既中には水星も認められ、また北の低空は夕焼けとなったが、南の空は赤くはならなかった。船はほとんど中心線上に位置し、皆既継続時間は3分40秒であった。

というわけで、今回の日食は大成功をおさめた。